

仏説阿弥陀經

②

浄土のうるわしいすがた

皆さまは「極楽浄土」と聞いて、どのような世界を思い浮かべられるでしょうか？ おそらく、多くの方が『阿弥陀經』に説かれるような、金・銀・瑠璃などで飾られた、きらびやかな世界をイメージされるでしょう。このような浄土の莊嚴（うらやま）のうるわしいすがたは、現代に生きる私たちにとって、まさに夢のようなものですが、これらは一体何を表し、またお説きになられた釈尊のお心持はどのようなものであったのでしょうか。



満井秀城
本願寺派司教

【註釈本文】 ▼二二頁

【二】 その時、仏、長老舍利弗に告げたまはく、「これより西方に、十萬億の仏土を過ぎて世界あり、名づけて極楽といふ。その土に仏まします、阿弥陀と号す。いま現にましまして法を説きたまふ。

【現代語訳】 ▼『浄土三部經（現代語版）』二二八頁

【二】 そのとき 釈尊は長老の舍利弗に仰せになった。「ここから西の方へ十萬億もの仏がたの国々を過ぎたところに、極楽と名づけられる世界がある。そこには阿弥陀仏と申しあげる仏がおられて、今現に教えを説いておいでになる。

■浄土が「西にある」とは？

前回の序分に引き続き、今回から正宗分に入って参ります。

阿弥陀仏の「正報」と、その国土である「依報」が詳しく説かれますが、冒頭の僅か数行に、これがまとめて説かれています。この後、依・正二報について広く讃嘆される（広讃）のに対して、仮に「略讃」と申しておくことにします。

依正の二報について、天親菩薩の『浄土論』では、「三嚴二十九種」と示されています。依報としての「仏国土」の莊嚴（十七種）と、正報としての「主仏」の莊嚴（八種）と「眷属菩薩」の莊嚴（四種）と、合せて三種の莊嚴になります。

「これより西方に、十萬億の仏土を過ぎて世界あり、名づけて極楽といふ」が、国土の莊嚴、「その土に仏まします。阿弥陀と号す」が、仏の莊嚴にあたります。これらは、すぐにわかっていただけだと思います。あと、眷属の菩薩の莊嚴が、どこにあるかということですが、「いま現にましまして法を説きたまふ」に相当します。「どういうことか」と思われるかも知れませんね。

たとえば、私が、どこかのお説教に講師として招かれたとします。ところが、日を間違えて、一日早く行ったとします。そうすると、誰も参詣者がいませんから、いくらお説教をしようと思っても、説教は成立しません。浄土において、「今現在説法」として、いつも阿弥陀仏の説法がなされているということは、

正宗分は、『註釈版聖典』に①依正段②因果段③証誠段と呼称されるように、大きく三段に分けられます。

この『阿弥陀經』では、浄土の依正二報（浄土の主仏であるそれを聴く眷属の菩薩方）が、つねに居ることになります。これらが「三種莊嚴」なのですが、ここで、特に「西方に十萬億の仏土を過ぎて」と説かれています。よく、「浄土が西にあるのなら、ずっと西に行ったら、地球は丸いので、また元に戻ってくるのではないか」という人がいますが、この釈尊のご説法は、地理的説明ではありません。

地理的説明とは、「京都駅から、北に500メートルくらい行ったら東本願寺があり、そこから西に1キロくらい行ったら西本願寺があります」というのが地理的説明ですが、今のご説法で、「十萬億の仏土を過ぎて」とは、地理的説明ではなく、『浄土論』に「勝過三界道（三界の道に勝過せり）」（七祖二九頁）と言われるように「絶対性」を表しているのです。そして、「西方に」とは、場所を限定する意味ではなく、思いを寄せるために方処を定めてくださっているのです。凡夫は心が散乱しますから、「廣大無辺際」の浄土に、思いを定めることができません。善導大師は、そのことを「空中に家を建てるようなもの」と譬え、凡夫には不可能であると示されています（七祖四三三頁）。どこかに方処を定めねば、心の散乱する凡夫は、思いを向けることができないのです。

曇鸞大師の伝記に基づいて、親鸞聖人が、ご和讃に、

世俗の君子幸臨し 勅して浄土のゆゑをとふ

十方仏国浄土なり なにによりてか西にある

鸞師こたへてのたまはく わが身は智慧あさくして

いまだ地位にいらざれば 念力ひとしくおよばれず

〔高僧和讃〕、五八二頁

【三】舍利弗、かの土をなんがゆゑぞ名づけて極楽とする。その国の衆生、もろもろの苦あることなく、ただもろもろの樂を受く。ゆゑに極楽と名づく。

【三】舍利弗よ、その国をなぜ極楽と名づけるかというとき、その国の人々は、何の苦しきもなく、ただいろいろな樂しみだけを受けているから、極楽というのである。

と述べておられるのは、この意味です。

また、「なぜ西方なのか」ということについては、道綽禪師の『安樂集』に、「太陽が西に沈むように、西方は万物の帰すところだから」と述べられています（七祖二七〇頁）。

■「自問自説」

前段略讚の「三種莊嚴」の内、「国土莊嚴」について詳しく讚嘆されるのが、「依報段」とよばれる一段で、本願寺派の説經において、途中で鑿を打つところまでが「依報段」で、浄土の莊嚴相が詳しく説かれています。その最初は、「依報」の総説に相当する一段です。

前段の略讚で示された「名づけて極楽といふ」という言葉を受けて、舍利弗に対し、「かの土をなんがゆゑぞ名づけて極楽とする」との問いから始められています。

舍利弗は何と答えたかというとき、実は、舍利弗の答えはなく、釈尊自身によって、「その国の衆生、もろもろの苦あることなく、ただもろもろの樂を受く。ゆゑに極楽と名づく」との答えが述べられています。『阿彌陀經』は、「無問自説」經という特別な意義があることを前回に申しましたが、ここでは、今や「自問自説」と言ってもよい状況になり、この「自問自説」にも、とても大事な意味があります。

舍利弗は、釈尊の問いに対して、なぜ答えなかったのでしょうか。答えることができなかつたのです。舍利弗のようなすぐれた弟子でも答えられないということから、浄土というさとり

世界のことは、人間の知恵では及ばないことを示しているのです。それにもかかわらず、私たちは、僅かばかりの知識を持っているというだけで、「浄土なんてお伽話だ」とか、「浄土なんて誰も見てきた者はいない」などと決めつけています。

何でも自分が一番よくわかつているつもりですが、実は、自分自身の明日さえもわかりません。そして、自分の力でわからないことは、わかつた方に訊くしかありません。山で道に迷ったときに、たまたま人に出会つと、「よかつた。これで、助かつた」と思います。ところが、その人も、「実は、私も迷つてゐるのです」と言われたら何にもなりません。迷つてゐる者がいくら集まつても解決の道は見出せないのです。「自分自身の明日がわからない」、「死んだら、どこに往くかわからない」。この問題には、凡夫がいくら集まつても答えは見出せません。人智の及ばない世界のことは、さとられた方（ブツダ）の言葉にしたがうしかありません。まさしく、このことを表しているのが、いま、釈尊の問いに対して、舍利弗の答えがないということなのです。

釈尊自身による答えは、「その国の衆生、もろもろの苦あることなく、ただもろもろの樂を受く。ゆゑに極楽と名づく」というものです。



釈尊の住居跡・ガンダクティ（祇園精舎）

『阿彌陀經』が説かれた祇園精舎は、コーサラ国の首都・舎衛城にあった出家修行者のための僧房である。雨期の三ヶ月間、修行者たちは一定の場所に集まり修行を行う「雨安居（うあんご）」を行ったが、釈尊は多くの雨期をここ祇園精舎で過ごした。写真は、釈尊が滞在したとされるガンダクティ。

「もろもろの苦あることなく」とありますが、「もろもろの苦なく」という言い回しではないことにも注意する必要があります。

果物屋に行つて、「メロンはありませんか？」と訊いて、ちようど仕入れがなかった時は、「ないんです」と言われますが、

また舍利弗、極楽国土には七重の欄楯・七重の羅網・七重の行樹あり。みなこれ四宝周布し圍繞せり。このゆゑにかの国を名づけて極楽といふ。

魚屋に行つて、「メロンはありませんか？」と訊いたら、「あるはずない」と言われるでしょう。これが、「あることなし」です。阿弥陀仏の浄土には、苦がたまたまないのでなく、最初から「あるはずがない」。苦など最初から存在しない、すべてが楽ばかりの世界ですから、極楽というのだと言われています。

また舍利弗よ、その極楽世界には七重にかこむ玉垣と七重におう宝の網飾りと七重につらなる並木がある。そしてそれらはみな金・銀・瑠璃・水晶の四つの宝でできていて、国中のいたるところにめぐりわたっている。それでその国を極楽と名づけるのである。

■いのちの価値

前段は、依報段の内、総説とでも言うべき一段でしたが、ここからは別説と言えるでしょう。具体的な浄土の莊嚴相を、さまざまな場面に分けて、ご説法がなされます。

その第一場面は、極楽浄土の具体相について、「七重の欄楯・七重の羅網・七重の行樹」と説かれています。

「七重」とは、単純な構造ではないことを表していますが、仏教で「七」とは、六道の迷いを越えた「さとり」を表してい

ることとも関係があるようにも思えます。「欄楯」とは、欄干や手すり、あるいは垣根のようなもので、言わば、ちようど目の線の高さにあるものです。「羅網」とは、空中を覆うもので、つまりは、はるか上空を表します。そして「行樹」とは、並木のことで、背の低い並木ではなく、ポプラ並木のような背の高い並木で、「目線の高さ」と「はるか上空」とに対して、「その中間」を表します。つまり、この「欄楯」・「羅網」・「行樹」の三つによって、「見えるものすべての範囲」を表しているのです。見えるものすべてが、「皆これ四宝」、すべてが宝である世界が

浄土なのだということです。すなわちすべてを宝として受け止めていける世界が浄土なのです。

私たちは、ものの本当の価値がわかりません。役に立つか、立たないか、自分にとって都合がいいか、悪いか、そんな見方しかできません。

私の子どもが、まだ小さかったころ、夏休みに大きなスーパーに行くと、カブトムシやクワガタムシを売っていました。「買ってくれ」とせがまれ、二つのことを約束させて買うことにしました。「世話は自分たちですること」、そして、「それぞれの生命の価値を値段で決めないこと」でした。「お兄ちゃんの方が高い」などと、決して言うてはならないことを約束させたので

す。私たちは、いのちの価値を値段で決めていないでしょうか。「鯛をもらったらうれいけど、イワシなら大したことない」などと思っていないでしょうか。何か戴きものがあった、その価値がわからない時、どうしていますか？箱を裏返したりして、値札を捜したりしませんか？私たちは、ものの本当の価値がわからないから、値段で判断しようとするのです。いのちの価値を平等に見ることのできない私たちの悲しい実態です。浄土とは、それに対して、すべてを宝として受け取っていける世界です。この浄土の莊嚴相によつてこそ、今の私たちのあり方も反省させられますね。

また舍利弗、極楽国土には七宝の池あり。八功德水そのなかに充滿せり。池の底にはもつばら金の沙をもつて地に布けり。四辺の階道は、金・銀・瑠璃・玻瓈合成せり。上に樓閣あり。また金・銀・瑠璃・玻瓈・磤磤・赤珠・碼瑙をもつて、これを嚴飾す。池のなかの蓮華は、大きき車輪のごとし。青色には青光、黄色には黄光、赤色には赤光、白色には白光ありて、微妙香潔なり。(中略)舍利弗、その仏国土には、かくのご

また舍利弗よ、極楽世界には七つの宝でできた池があつて、不思議な力を持った水がなみなみとたたえられている。池の底には一面に金の砂が敷きつめられ、また四方には金・銀・瑠璃・水晶でできた階段がある。岸の上には樓閣があつて、それもまた金・銀・瑠璃・水晶・磤磤・赤真珠・碼瑙で美しく飾られている。また池の中には車輪のように大きな蓮の花があつて、青い花は青い光を、黄色い花は黄色い光を、赤い花は赤い光を、白い花は白い光を放ち、いずれも美しく、その香りは気高く清らかである。(中略)

ときの功德莊嚴を成就せり。

舍利弗よ、阿弥陀仏の国はこのようなるわしいすがたをそなえて
いるのである。

■浄土の風光

浄土の具体的な風光を、きわめて詳しく説き示してくださいませ。

そこには、「こう言えば、浄土に往きたいと思ってくれらるうか」「ああ言えば、浄土に往生したいと思ってくれらるうか」との、衆生を憐れみいたむ釈尊の思いが溢れています。

「浄土は、廣大無辺際で、無自性空の世界です」こう聞かされても、私たち凡夫は、「ああ、そうですか」というだけで終り、その浄土に往生したいとは思いません。どう説いたら、私たち凡夫が、願生心を起してくれるだろうか。その切なる思いが、浄土の風光として、詳しく説き示して下さっているのです。この釈尊の切なる仏意を見失って、ただ、雲の上の話に聴いてしまふから、「お伽話だ」とか「実体的だ」とか思うのです。

時折、この『阿弥陀経』の浄土を、「権仮方便だ」とか、「二十願の化土だ」とか言う人がいます。確かに、親鸞聖人には、「浄土三部経」を、第十八・第十九・第二十の三願に配当し、

『阿弥陀経』を、第二十願の経と見る見方もされています。しかし、その場合でも、『阿弥陀経』に隠顕がかかる（第二十願の意が見られる）のは、自力念仏の因果段（修因段）の一節であつて、依報段に説かれる浄土の莊嚴相は、第二十願の浄土ではありません。

それは、『教行信証』の「化身土文類」に、「化身土」（方便化土）については、「土は『観経』の浄土これなり」（三七五頁）とあつて、『阿弥陀経』の浄土を「化土」とは指定していません。

さらに、「化身土文類」要門釈において、第二十願の意を顯す中に、善導大師の「散善義」が引かれています。そこでは、「すなはち『弥陀経』のなかに説かく、（乃至）（また）一切凡夫を勧めて、一日七日、一心にして……」（四〇二頁）として『阿弥陀経』の文が引かれています。浄土の莊嚴を説き示す依報段の部分は、「乃至」として省略され、「若一日」等の因果段を、自力の相として引文されておられるのです。つまり、『阿弥陀経』に説かれる浄土のすがたは、決して方便化土ではないこと

がわかります。

親鸞聖人が、「讚阿弥陀仏偈讚」に、

歸命方便巧莊嚴

ここもことばもたえれば

（五六二頁）

とよまれたように、私たち凡夫に、「歸命」の心を起こさしめんがための「巧みな」でだて（「方便」としての「莊嚴」）なのです。ここに言う「方便」は、真実でない「権仮方便」ではなく、如来の大悲のあらわれとしての「善巧方便」のことです。それは、「ここもことばもたえれば」とあることによつてわかります。私たちの自力の心や、自力の表現によつては及ばない世界のことです。誤解する人は、この「善巧方便」と「権仮方便」とを取り違えているのでしよう。

学習のポイント

- (1) 阿弥陀仏の浄土が西方にあると説かれていることの意味を考えてみましょう。
- (2) 浄土の莊嚴相は、私たちに何を気づかせてくれるでしょうか。
- (3) 浄土の莊嚴に込められた釈尊のおこころについて考えてみましょう。

祇園精舎の最寄りの町であるバラランブルの並木道